

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：82611

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23610011

研究課題名(和文) 芸術活動を続けている精神疾患当事者の作品の分析に基づく啓発資材の開発に関する研究

研究課題名(英文) Development of the awareness material regarding mental health issues, using artwork created by people with mental health problems

研究代表者

竹島 正 (TAKESHIMA, TADASHI)

独立行政法人国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所精神保健計画研究部・部長

研究者番号：20300957

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円、(間接経費) 1,260,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、精神疾患当事者の制作した芸術作品を用いた精神保健の啓発教育資材を作成することを目的とした。精神疾患当事者への面接調査をもとに、啓発資材案「やさしさのなかの、たくましい生き方 - 芸術活動を続けている精神疾患当事者から学ぶこと」を作成し、2つの大学の学生を対象としたグループディスカッションを含めた講義を行った。質問票調査の結果、啓発資材案を用いた講義の前後で、学生の精神に障害を持つ人に対するイメージはよりポジティブなものへと変容したことがうかがえた。以上の結果から、本研究において作成された啓発資材は一般市民の精神疾患当事者に対する理解・共感を高める可能性があることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The objective of the present study was to develop educational materials to increase the awareness of mental health issues, by using artwork created by people with mental health problems. We created a sample of the awareness material, based on interviews with people with mental health problems, and subsequently conducted educational lectures for undergraduate students, including group discussions between students at two universities, using this material. The results of a questionnaire survey administered to these students suggest that after these lectures, their attitudes towards people with mental health issues changed favorably. The findings imply that our material has the potential to promote sympathetic and favorable attitudes towards people with mental health issues, among the general public.

研究分野：時限

科研費の分科・細目：共生・排除

キーワード：芸術諸学 医療・福祉 精神疾患経験者 美術活動 メンタルヘルスプロモーション

1. 研究開始当初の背景

精神医学の領域では、これまでに芸術活動の治療的側面に着目して、芸術療法の発展にもつながってきた。しかしながら、これらは治療者としての見方が主であって、精神疾患当事者の制作した作品を、そのライフコースを踏まえて、精神保健、美術の観点から総合的に捉える視点とは言えない。

このような視点を得るため、われわれは、まず精神疾患当事者による芸術活動支援の現状を把握することを目的として、都道府県・政令指定都市を対象に、質問紙調査を行った。調査では、精神疾患患者として絵画・造形表現等の作品を出展できる 2007 年度開催の展覧会について各自治体が把握している情報の報告を得た。さらに、地域で芸術活動の支援を行っている組織・団体・個人の情報を尋ねた。その結果、精神疾患当事者を対象とした芸術作品の展覧会について、自治体が保有する情報は少ないことが明らかになった。

また、われわれは、全国精神保健福祉連絡協議会等と協働して、精神疾患患者の芸術活動の成果のうち、精神疾患についての国民意識の改革に資する作品の情報を全国規模で収集し、そのデータベース化と分析を行った。この情報収集によって 403 名の作者による 1,078 点の作品情報を収集することができた。また、精神疾患患者美術作品の展覧会「こころの世界—作品を多角的にとらえる」を開催し、入場者にアンケート調査を行い、その分析を行った。

これまでの研究から、精神疾患当事者による美術作品は、一般人の精神疾患への偏見を少なくして、適切な態度を形成し、共生社会の実現に寄与する可能性があることが報告されている。また、創造的な美術作品は、精神疾患当事者の回復に持続的な効果がある可能性があることが報告されている。

美術作品を活用した組織的啓発活動として、豪州メルボルンにある DAX センターの活動が挙げられる。DAX センターにあるコレクションは、美学的な品質よりも、精神保健、美術そして教育の交わることを重視する。すなわちコレクションの根源は精神障害を経験した人の人生にあり、現在、NGO として運営されており、作品の保存要否の決定、著作権等の扱いについて規定をつくり、学生教育や展覧会に広く活用されている。

厚生労働省の平成 20 年患者調査によると、精神疾患のために医療機関を受診している患者数は 300 万人以上となっている。また、WHO（世界保健機関）が主導して行った国際的な精神疾患の疫学共同研究である WMH(World Mental Health、世界精神保健) Survey によると、わが国の成人人口の 10%程度が、1 年間のうちに何らかの精神疾患を経験していると思われる。このように、精神疾患は一般国民にとって身近なものであるが、それについての正しい

理解を育み、共生社会を実現していくには、精神疾患、そして何よりも精神疾患当事者の正しい理解を広めることが望まれる。

上述の DAX センターの前身であるカニングム・ダックス・コレクションの公式の開設は 1987 年であって、それ以後だけでも 20 年以上にわたる努力と経験を重ねてきており、共生社会の実現のための教育にも大きく貢献している。この積み重ねと比較すると、わが国における精神疾患当事者の美術作品についての研究は、美術または精神病理学の中の片隅に存在しているのが実態である。

さて、精神疾患は、がん、心臓疾患と並ぶ大きな健康問題となっており、WHO が公表した DALY (Disability Adjusted Life Years: 障害調整生命年) の 2004 年推計値によると、わが国では上位 5 つのうち 2 つが精神疾患である。精神疾患当事者の一部は、精神疾患とそれによる障害や偏見を経験しながら生きていくことになるが、その人生において、美術作品の制作に持続的な関心を示し、本人の生きがいとしていく人たちがいる。ここで制作される作品群は、精神疾患当事者のよるこびや苦悩を反映することとなり、共生社会の実現に向けての貴重な資料となる。

精神疾患当事者の美術作品には、これまで、美術、精神病理、精神科リハビリテーション等の領域で個別に関心が示されてきた。しかし精神保健、美術の総合的な観点から、作者および作品について詳細な調査を行い、その人生と精神疾患の経験、よるこびや悲しみと作品の変化等を多角的にとらえる研究は行われていない。本研究の特色は、美術作品の制作に生きがいをもつ精神疾患当事者の人生と、その各段階において制作される作品を、当事者の人生を踏まえて、精神保健、美術の観点から総合的に捉え、精神疾患当事者の美術作品をもとにした、共生社会の実現を図る啓発資材の開発に取り組むところにある。

本研究において期待される成果として、精神疾患当事者の美術作品をもとにした啓発教育資材の開発によって、精神疾患についての根強い偏見を和らげ、共生社会の実現に向けての革新的な一歩を築くことができることである。また、精神疾患当事者の生きがいという観点から、当事者研究の発展にも貢献することである。

2. 研究の目的

本研究では、芸術活動を生きがいとしている精神疾患当事者の制作した芸術作品を精神保健および美術の観点から総合的に評価し、それらをもとにした共生社会の実現に向けての啓発教育の資材を開発することを目的とした。

3. 研究の方法

平成 23 年度には、芸術活動を続けている精神疾患当事者への面接調査を実施した。全

国精神保健福祉連絡協議会の保有する精神疾患者の芸術作品の情報のうち、同協議会のウェブサイト、作者の氏名、プロフィール、制作の動機について掲載することに同意している精神疾患当事者、または本研究の研究協力者を通じて協力を依頼できる精神疾患当事者のうち、下記の条件を満たした20名程度を対象とした。

1) 成人であること

2) 作者の人生と精神疾患の経験、よろこびや悲しみと作品の変化を捉えうると、精神保健、美術の専門家が判断した者であること

3) 全国精神保健福祉連絡協議会、もしくは本研究の研究協力者を通じて、本研究への協力依頼を行い、本研究の趣旨を理解した上で、対象者の同意が得られること

書面による同意が得られた対象者には保管する作品の閲覧を求め、作品を前に、本人の人生と精神疾患の経験、喜びや悲しみと作品の変化等について、生活歴、精神科治療歴、作品を制作するようになったきっかけ、制作継続年数、現在の生活状況、制作状況等、作者の人生と精神疾患の経験、よろこびや悲しみと作品の変化、支えとなっている人や組織等を含めた面接調査を行った。

平成24年度には、作者本人、精神保健専門家、美術専門家等の意見を踏まえ、啓発教育用の啓発資材案を作成するための検討を行った。啓発資材（一次案）の出来た段階で、精神保健専門家、美術専門家等による啓発資材（一次案）の評価を行った。

これらの成果を踏まえ、25年度研究では、冊子として啓発資材案を作成した。（資料1「やさしさのなかの、たくましい生き方—芸術活動をしている精神疾患当事者から学ぶこと—」）本研究の成果物である啓発教育の資材には、本研究の対象者である精神疾患当事者の人生と精神疾患の経験、よろこびや悲しみと作品の変化、さらには作品の画像が掲載された。啓発資材の作成に当たっては、その当事者に係る記載内容すべてを確認してもらい同意を得た。これを使用した啓発教育を2つの大学の学生を対象に試行し、参加者への質問票調査をもとに啓発資材案の評価を行った。質問票は、回答者の精神疾患当事者に関するイメージについての項目を中心に構成された。

資料1 啓発資材案「やさしさのなかの、たくましい生き方—芸術活動をしている精神疾患当事者から学ぶこと—」



啓発教育のプログラムは下記の通りである。

やさしさのなかの、たくましい生き方 —芸術活動をしている 精神疾患当事者から学ぶこと—

- ・はじめにアンケートへの回答をお願いします（10分）
- ・次に、この冊子とその画像を含む、短い講義を聞いてください（30分）
- ・それから、この冊子をお読みください（30分）

休憩（10分）

- ・4人くらいのグループをつくり、この冊子にある1人か2人を選んで、話し合ってください（30分）
- ・作品とストーリーから何を思ったか
- ・作者はどんな気持ちで暮らしてきたのか、また暮らしているのか
- ・その他、自由に話し合ってください
- ・グループで話し合われたことを、みんなに報告してください（40分）
- ・最後に、もう一度アンケートにご回答ください（10分）

4. 研究成果

23年度における芸術活動をしている精神疾患当事者への面接調査、および24年度における作者本人、精神保健専門家、美術専門家等の意見を踏まえ、啓発教育用の啓発資材案を作成するための検討を踏まえ、25年度研究において啓発資材案の冊子版（「やさしさのなかの、たくましい生き方—芸術活動をしている精神疾患当事者から学ぶこと—」）を作成した。

そのうえで、2つの大学の看護学・社会福祉学を専攻する学生129名を対象に、25年度に作成した啓発資材案を用い、グループディスカッションを含めた啓発教育の講義を行うとともに、講義前後で質問票調査を実施した。SD法を用いた質問票への回答を分析した結果、啓発資材案を用いた講義の前後で、学生の精神に障害を持つ人に対するイメージはよりポジティブなものへと変容したことが示唆された。また、性、専攻分野、および精神疾患当事者と関わった経験の有無にかかわらず、講義後には学生の精神疾患当事者に対するイメージはよりポジティブなものへと変化したことがうかがわれた。

以上の結果から、本研究において作成された啓発教育用の啓発資材案は、学生を含めた一般市民における精神疾患当事者に対する理解・共感を高め、精神疾患についての正しい理解を促し、ひいては共生社会の実現に寄与しうることが示唆された。今後、調査対象をさらに広げた評価研究を実施し、本研究で

作成された啓発資材案の有用性の検証、ならびに資材の普及につなげていくことが望まれる。



資料2
講義風景



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 竹島 正: 革新的な啓発活動を進めるダックスセンター【第3回】カニンガムダックスコレクションの誕生とその後の発展. 心と社会、査読なし、43(2):116-122, 2012.
- ② 竹島 正: 革新的な啓発活動を進めるダックスセンター【第4回】カニンガムダックスセンターとの連携活動. 心と社会、査読なし、43(3):90-96, 2012.
- ③ 竹島 正: 革新的な啓発活動を進めるダックスセンター【第2回】カニンガムダックスコレクションの誕生前. 心と社会、査読なし、43(1):94-98, 2012.
- ④ 竹島 正: 革新的な啓発活動を進めるダックスセンター【第1回】革新的な啓発活動を進めるダックスセンター. 心と社会、査読なし、42(4):94-99, 2011.
- ⑤ 小野さやか, 竹島 正: 活動の始まりの頃 芸術活動による共生社会の実現を目指す取り組み～芸術活動を続けている精神障害者の活動から～. ころの健康、査読なし、第26(2):69-73, 2012.
- ⑥ 竹島 正: メンタルヘルスの問題を経験した人たちの芸術活動のもつ意味. みんなねっと、査読なし、68:14-15, 2012.

[学会発表] (計3件)

- ① Takeshima T: SY11-01 Art for Mental Health Promotion: the Present State and Prospects. 6th International Meeting of WPA Anti-stigma Section, Tokyo, Sabou kaikan, 2013.2.12-14.
- ② Yamauchi T: Attitude of visitors attending a consumer art exhibition held in Japan in 2009 towards artworks created by people with mental illness. 6th

International Meeting of WPA Anti-stigma Section, Tokyo, Sabou kaikan, 2013.2.12-14.

- ③ Takeshima T, Oda N, Higashino K, Yamauchi T: Japan's Activities for Mental Health Promotion using Art. Asia Australia Mental Health, Melbourne, 2011.11.9.

[図書] (計0件)

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

- ① 啓発資材案「やさしさのなかの、たくましい生き方—芸術活動を続けている精神疾患当事者から学ぶこと—」01-46, 2014.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹島 正 (TAKESHIMA, Tadashi)
(独) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 精神保健計画部長
研究者番号: 20300957

(2) 連携研究者

立森 久照 (TACHIMORI, Hisateru)
(独) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 精神保健計画部 統計解析研究室長
研究者番号: 60342929

川野 健治 (KAWANO, Kenji)

(独) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 自殺予防総合対策センター 自殺予防支援研究室長
研究者番号: 20288046

(3) 研究協力者

山内 貴史 (YAMAUCHI, Takashi)
(独) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 研究員
研究者番号: 10598808